

きょうと福祉倶楽部だより

2020年 8号

きょうと福祉倶楽部有田の友人、元新聞記者で現フリージャーナリストの藤井満さんが奥さまを看取った手記です。彼は悩んだ末に自宅で看取る決断をして、のこされた時間を大切にしながら彼女の人生を实らせました。

■がんの妻を看取る 病院か在宅か①

2017年8月、私の妻は50歳の誕生日を目前にして悪性黒色腫（メラノーマ）と診断されました。きわめて転移しやすく、一度転移すると治すのは難しいがんです。「巨人の星」の星飛雄馬の恋人がこの病気で亡くなっています。

新しい薬が開発され、ここ数年は治療成績が上がっているのですが、残念ながら半年後に肝臓などへの転移が見つかり「ステージ4」と診断されました。2018年3月には激痛に襲われて救急搬送されました。

考えたくはないけれど、最期の日々をどこで過ごすのか、という話題は避けられません。

私はできるだけ家にいてほしい。でも具体的に考えると、家事能力ゼロだし、着替えや入浴などの世話などできそうもない。ヘルパーさんがいれば何とかならないかなあと考える程度でした。そんな私の頼りなさを見越したように妻は「病院のほうが安心できる。ごはんも着替えも、急に体調が悪くなったときも対応してもらえるやん」と言いました。

病気が判明してから、体調が悪い時に家事を手伝えるようにと、料理や掃除の方法を妻から習っていました。妻の指導はとにかくきびしい。

「そんな手つきじゃ指切ると！」

「塩入れすぎや。血管ぶち切れたいんか！」

「肉をさわった手で生野菜にさわるな！」

こちらは妻を手助けするつもりではじめたのだから、罵詈雑言に理不尽なものも感じました。でも妻は自分の死後を見すえて私に生活力をつけておこうと必死だったのだと後にわかりました。

それらの経緯は、朝日新聞デジタルの「僕のコーチはがんの妻」という計16回の連載記事で昨年12月に紹介しました。秋には加筆して同じタイトルで本にまとめる予定です。

一度はがんが縮小して退院にこぎつけ、6、7月は家で暮らし、小旅行にも出かけました。でも8月になるとまた体のあちこちに痛みがではじめ、8月23日に再び入院しました。

まもなくあちこちに転移していることがわかり、脊髄に針のようなものを刺してがん細胞の有無を調べるという検査を提案されました。

「転移はもうわかっているのだから、これ以上つらい検査はやめてほしい」と断りました。すると数日後、「あと1カ月程度」と余命を告げられ、「もうできる治療はありません。手術を待っている患者さんがたくさんいるので……」と退院を迫られました。

入院していたのはがんセンターなので、ほかの病院よりは看護師の配置は手厚いはずですが、でもそのころには、そんな一流の病院でも「病院の方が安心」とは思えなくなっていました。

基本的にはやさしくて親切な看護師さんが多いのですが、夜間にトイレに行きたくて何度もナースコールを押すと「いいかげんにしてください！ おむつにすればいいでしょう！」と怒鳴る看護師もいました。これは「〇〇という看護師はひどい」と妻が言うからICレコーダーをベッドの下に置いて確認しました。

体調が悪化し、ナースコールを押せなくなると、心電図モニターなどを装着されます。

ナースステーションで容態の変化をチェックすることはできるけど、1、2時間に一度の巡回以外は痛みや苦しさを伝えることはできません。

これならば家にひとりでもあまり変わりません。

がんセンターには緩和ケアチームがあります。忙しい病棟の看護師さんに比べると、じっくり話を聞いてくれて、不安な心を落ち着かせてくれる。

とてもありがたい存在ですが、病院の緩和ケアには

「生活」という視点が決定的に足りないことに気づくことになりました。

(つづく)